

礼拝 2020年4月19日(日)

題 『あなたがたに平和があるように』

テキスト：ヨハネによる福音書20：19～23

今日の聖書の箇所には復活された主イエスが弟子達に現われ、あいさつされた出来事が記されています。「19:その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」新約聖書の原語はギリシア語で、「平和」は「エイレネ」と言う言葉で、「こんにちは、さようなら」としても使われるようです「祝福があるように。」との意味にとってもよいようです。このエイレネは、旧約聖書のことばユダヤの言葉では、「シャローム」です。シャロームも、「こんにちは」とか「さようなら」の意味があります。つまり、復活されたイエスさまは弟子たちに現れた時、「平和があるように」「シャローム」と呼びかけられたのです。「安心しなさい。祝福があるように。」という意味とも受けとめるのです。

よみがえられた主イエスが、復活された日の夕方、ユダヤ当局者を恐れて一つ所に集まっていた弟子たちの所へ来た時、弟子たちは、自分たちも逮捕されることを恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていたのです。人間は、恐れや不安には誰でも弱いのです。恐れや不安は、人間の心を委縮させ、閉じさせてしまいます。恐怖心に支配されると身も心も頭も、委縮してしまうのです。

状況は違っていても、今は新型コロナウイルス感染拡大の中、病気をうつされても困るし、自分が菌を持っていてうつしてもいけないし、と閉じこもってしまうような毎日です。長期にわたるのかもしれませんが。

弟子たちの状況は、ユダヤ当局に見つかれば、弟子たちもイエスの仲間ということで、つかまってしまうかもしれなかった状況です。いわば、緊迫した状況にあったのです。

ところで、洲本教会出身の島田巖牧師が定期的に送ってくださる週報に以前記されていた「先週の説教より」とうコーナーに書かれておられる文にハッとさせられることがありました。一度お話しした事がありますが、ある文章では、「地上に混乱がある時に、もっとも必要なものは、『冷静と安心と忍耐』である」ということばがありました。「そうだな～」と思わされたのです。言葉や情報が乱れ飛ぶ中で、冷静であること、それは騙されないためにも必要なことです。

人には不安がつきものです。しかし、キリストが共にいてくださる、自分の

語るべきことばを与えてくださると思える時、感謝できる時、信じることのできる時、心に安心が宿ります。そして忍耐して神の助けを待ち望むことができるのです。

今は神の前に、心を静めることの大切さを覚えるのです。弟子たちの中には、恐れと共に、自分たちの不甲斐なさも感じていた人もいたのではないかと思います。わたしも当時、十字架の現場にいたら、きっと逃げたと思います。あんなにイエスさまを尊敬し、信じて生きて来たのに最後のところで、十字架に見捨ててしまったのです。「情けない」という思い、やりきれなさが弟子たちの心を支配していたことでしょう。彼等はそのような状況の中で、家の戸に鍵をかけていたわけです。心落ちつかず、心身圧迫状態だったことでしょう。

緊迫した状況にある、不安で落ち着かない弟子たちの中に、復活されたイエスは入って来られたのです。いとも簡単にです。風のようにすっ〜とです。

「風」は神さまの力で「聖霊の原語」のです。神さまは聖霊は、どんな中にも入って来てくださるのです。入って来れるのです。恐れと不安のただ中にもです。「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」のです。

それにしても、戸は閉じられていたのに通り抜ける復活のイエスの力とは何とすごいかと思わされます。何とかして弟子たちの所に行こうとする主イエスの愛、強い意志を感じます。神さま全能だと言われます。全能とは、何でも自分の思い通りにするというのではなく、全き愛というように受けとめることができるのではないかと思います。恐れている弟子たちたちの、真ん中、それも真ん中に、いとも簡単に入って来られ、シャローム、平和があるように、冷静でありなさい。安心しなさい。忍耐しなさい。と、語りかけてくださっているのです。聖霊は、今も働かれる神さまの力です。肉眼の目には見えなくても、風のように、言葉を持って、今日、わたしたち一人ひとりの心と体の中に入って来てくださろうとしておられるのです。この生かす力を受けましょう。

20:そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスさまの手と脇腹には十字架の上で受けた釘や槍の深い傷跡があったのです。十字架の事実は傷跡として痛みは残っているのです。

それでも主イエスは弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と語りかけられたのです。胸が打たれる思いがします。イエスさまの弟子たちへの深い

愛を感じるのです。人間には難しいアガペーの愛であり無償の愛です。

22:そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

弟子たちは、神の力である聖霊を受けて、派遣されていくのです。これから先、この世に派遣されるのです。これは、わたしたち、キリスト者、教会の姿でもあるのだと思わされます。

神さまは、今も働く聖霊、御霊として日夜、朝も昼も夜中も、たとえ私たちが寝ているときも、うれしい時も、悲しい時も、不安な時も、怯える時も、生きて働いておられるのです。わたしたちが生きるためにです。

復活されたイエスさまは、弟子たちに聖霊の息を吹きかけ、働きを託されます。それは「罪の赦し」の働きです。ある著名な牧師は、晩年に「3人の人は赦せない。」と語られたとのこと。正直な方だと思うのです。

「罪の赦し」とは、自分の力ではなく神さまの力聖霊の働きによって起こるのだと思います。自分たちが見捨てたイエスさまが、弟子たちを一切責めることなく、「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。どんなにうれしかったでしょうか。慰められたでしょうか。受けたイエスさまの赦しの力で、人は今まで赦せないと思っていた人も、憎まずに復讐せずにすんで行けるのかもしれない。それは既に赦しの道の入り口に入っているのではないかと思うのです。赦しの力は、分断された者たちの回復力です。赦しは、復元可能です。

人は自分が主イエスから赦されたことを知って人を赦せるようにされていくのです。傷を受けた事実と痛みは残ります。たとえ傷跡は痛みは残っても、それに勝る神の愛に包まれていることも感じる事ができるのです。これば理屈ではなく、神の恵み以外の何物でもないのです。「我が恵みなんじに足れり」(II コリント 12章9節、文語訳聖書)という主の声を聞きながら生きて行けるのです。感謝のほかありません。「平和があるように」というシャロームの言葉が、わたしたち一人ひとりを通して、赦しの広がりとして、わたしたちの間に、この地域と社会と国と世界に実現して行くのです。

生活の中で、聖霊の風を受けて愛の働きを求めて広めて生きて行く私たちにありたいと願います。

◆イエス、弟子たちに現れる

19:その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

20:そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

21:イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

22:そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

23:だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」